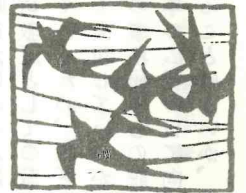


仙台司教区

教区事務所だより



(第 44 号)
昭和56年6月1日

“この子に司祭の召命は？”
教区に召命促進のふんい気づくろう！

五月十日は第十八回全世界召命祈願の日であった。教皇ヨハネ・パウロ二世はその日のメッセージで、召命促進は全キリスト共同体の義務であると強調した。私たちはその日にどれほどの熱意をこめて召命のために祈ったであろうか。召命をどれほど自分のものとして認識しているだろうか。あらためて反省してみる必要があるだろう。

カトリック教会では司教や司祭などの聖職者や、修道士、修道女の存在は欠くことができない。信仰生活の大きな助けとなっていることは疑いない。教会が存続するための最も重要なカギともいえる。ところがご存知のように、修道者はもちろん聖職者も独身性を守るため、世襲による人材の確保はできない。教会は絶えず新しい人材を聖職者、修道者として迎える利点はあるものの、人材の補給と確保には大きな努力が必要とされている。信

徒の中から司祭や修道者を養成する召命の促進が、教会にとってはいつても重大な課題となっているゆえんである。

司祭や修道女の召命はなにも特別なものではない。私たちの周囲、つまり、私たちの子女、私たちの兄弟姉妹、私たちの友だち、そして私自身が司祭に召されていないか、修道女になれないか、といったところから始まる。教会が健全に存続しつづけるためには、信徒の中から優秀な人材が司祭や修道者にならなければならぬ。その供給源となるものは信徒の家庭である。あなたの子どもに召命がありはしないか、あなたは神に召されている、という言い方は突飛と思われるだろうが、本当はこれらのことが素直に信徒家庭で語られていなければならぬのである。

もっとも、召命ということをも自分のものとして考えるようにしよう。司祭職の重要性、

修道生活のすばらしさが家庭の中で常に語られ、両親をはじめ多くの信徒にその雰囲気のみながっているなら、たぶん召命はもっともとふえることだろう。召命促進のためにはまずその努力が必要な気がする。

わが仙台教区は神学生も少なく、司祭志願者が生まれることはいまなによりもぞまれている。信仰の眼で司祭職を正しく認識し、若い人たちを司祭職への道に進ませるため、主任司祭や両親をはじめ、すべての信徒はそのことを強く説かなければならない。言葉で教えるだけでなく、信仰の態度で模範を示し、はっきりと教えなければならぬ。仙台教区のあるところ、語り合われるようにしよう。

司教様の日程

(5月10日現在)



- 6月10日～11日 神学生養成担当者会議 (東京カトリック神学院)
 - 11日 カトリック医療協合理事会(仙台)
 - 12日～13日 同右総会(仙台)
 - 13日 カトリック医師会総会(仙台)
 - 21日 郡山教会堅信
 - 22日 仙台カテキスタ会役員会(事務所)
 - 28日 聖ベトロ・聖パウロ祭日(元寺小路)
 - 29日 教区司祭団月例会
- 7月第3週から月末まで、国際聖体大会出席のため不在となります。

“あけの星荘” 盛大に落成式▽

教区経営で

二番目の老人ホーム



4月28日午後1時から、軽費老人ホームあけの星荘の落成・祝別式が佐藤千敬司教の司式で行われた。あけの星荘は仙台教区の社会福祉法人カトリック児童福祉会が設置するもので、既存の特別養護老人ホーム暁星園について教区は二つの老人ホームを持つことになる。場所も暁星園のとなり(仙台市安養寺2の24の1)。快晴にめぐまれた落成式には、教区内外から司祭や修道女、福祉関係者、工事関係者ら約二百人が出席。同法人理事長の佐藤司教はあいさつで、完成までに多くの方々の善意と協力があつたことを特に強調して感謝した。すでに十年以上前から仙塩地区のあけの星婦人会の提唱で老人ホームがのぞまれ、教区司祭会館を利用したあけの星老人ホームが見事な実を結んだものともいえよう。

新しい建物は鉄筋コンクリート三階建、四十六の個室と二つの夫婦部屋で定員五十人。すでに四十人ちかくが入居し、完備した新しいホームを楽しんでいる。一階は大食堂、調理室、従業員宿舎(三)、二階は談話室(二)、個室、三階は個室、浴室(二)でエレベーターがある。昨年9月に着工、銭高組仙台支店の施工で総工費は約三億円。全国各地の教会、修道院から寄せられた基金も多かった。園長は本間重治神父が暁星園と兼任、福音の精神に基づいた暖かい老人福祉を目指して情熱を示し

ている。仙台教区経営の老人ホームであり、司祭や信徒は格別に関心を持つようにしよう。

第二回・仙台教区

広報担当者集会

―五月十日開催―



世界広報の日に先立って、仙台教区の広報担当者の集会が、去る5月10日(日)、午後1時半から4時半まで、司教区事務所で開催された。今年各県の広報担当者6名と女子パウロ会からの参加も得て、11名出席のもとに行われた。はじめに、「教会における広報のあり方」というテーマで、世界広報の日のテーマ「マスコミと人間の責任ある自由」に触れながら三浦平三神父の講話が行われた。

その後、各県の現状と報告、及び教区だよりに対する意見、希望などが出された。

特に話題になった事は、教区だよりに、一般の社会問題、信徒のよろこび、苦しみの生の声をもっと出せたら、という事である。現在は、各地区の広報担当者の協力で各地区のニュースは大体把握できるようになったので、今後は、それに加えて、役に立つ、みんなのための教区だよりとして投稿を積極的に出してもらいよう呼びかけることになった。

また、仙台司教区としての教会共同体の意識を盛り上げていくため、教区目標をどのように各小教区で実現しているかも取り上げていきたい、との事務局からの説明もあった。

最後に、来年の広報の日に向けて、教区として、何かすることはないか、今から考えて

いこうと確認し合って、会を閉じた。

なお、本年度の各県の広報担当者は次の通りである。教区だより、広報についての意見、及び投稿等は、広報担当者、又は司教区事務所まで直接お寄せいただきたい。

- 和野邦義(東仙台) ● 佐々木正吾(塩釜)
- 斎藤正一(四ツ家) ● 藤村 重実(塩町)
- 新松義男(青森・本町) ● 木戸清吉(松木町)
- 古田繁男(小名浜)

● 岩手県・教会学校 ……………

去る4月28・29の両日にわたり、盛岡四ツ家の岩手カトリック・センターで、岩手県内の教会学校指導者研修会が行われた。

この会は、今回で第13回を数え、毎回、講話やデイスカッションを中心とした意義深い恒例の行事となっている。今回のテーマは、「奇跡について」。第一日はツィゲル管区長様による「奇跡のことをどう子ども達に教えるか」についての講話があり、その後四ツ家教会青年会作製のスライドを鑑賞。二日目は奇跡についての具体例を聖書の中から取りあげ、それについての話し合いを持った。日ごろ、子ども達への説明に困難を感じているテーマであったことから出席者も20数名と多く、食事時間も惜しんで各教会の様子を交換、子ども達へ教える立場を再確認して別れた。

なお、今回は女子パウロ会のシスター二名も加わり、色々な教材の紹介なども行われた。

(水沢教会・千田和子)

*** **おめでとう*** **
 ** 喜寿と叙階五十周年 **
 *** ** プノワ・ラローズ神父様 *** **

ドミニコ会のプノワ・ラローズ神父(湯本教会主任)は、来る7月15日司祭叙階50周年を迎える。また今年は丁度77歳の喜寿。そして明年は、来日して50年と三重の喜びがやってくる。この長い宣教生活に神の豊かな祝福を祈り求めよう。

ラローズ神父は、一九三一年七月十五日カナダ・ケベックのドミニコ会で叙階、翌三十二年に来日した。まず東京で、文法の本と辞書を片手に、独力で日本語の勉強、その後福島に移り、故海老神父を日本語の先生に勉強を続け上手になった。その後仙台・角五郎丁、会津若松、大河原教会を歴任。間もなく第二次世界大戦が勃発したため、他の外国人神父・修道者等と共に三年間元寺小路教会に抑留された。後の三年間は浦和に移され、そこで終戦を迎えた。

戦後は五年間東京に住んだ以外は、福島県が宣教の中心となり、福島十一年、郡山十年、「そして知らない間に年をとってしまい、大きい教会から小さい教会に移りました。今は信者よりお湯が多い(湯本)教会にいます。」と、ユーモアを交えて語られる。

ラローズ神父は、仙台教区の戦前、戦後を知る外国人司祭の数少ない一人であり、特に福島県の教会の土台を築かれた恩人である。

湯本教会では、盛大な祝賀会を計画中である。

祝 叙階二十五周年 *

川 井(古川)
 バルデス(田島)
 レヴェイエ(三沢) 三司祭



この夏、叙階二十五周年を迎えるのは、古川教会主任の川井啓神父、ケベック会のアントレ・レヴェイエ神父(三沢教会主任)、グアダルベ会のアントニオ・バルデス神父(田島教会主任)の三人である。

川井神父は、二十五年前の六月十日カナダケベックで司祭に叙階、同年十月日本に帰国。元寺小路、築館、古川各教会を歴任。当時はオートバイで、古川、大崎地方を巡回宣教。若き日の川井神父の勇姿を知る人もいるだろう。その後、西仙台、暁星園園長として、社会福祉にも尽力した。現在、古川教会に再び着任して四年になるが、地方教会の宣教のため尽くしている。

ケベック会のアントレ・レヴェイエ神父(三沢教会主任)は、カナダのケベック大神学校で六月二十三日司祭に叙階、同年十月来日、東京の日本語学校で2年間学んだ後、十和田、五戸、浪打、弘前の各教会を歴任、現在の三沢教会に着任して十年になる。三沢には米軍基地があり、基地内の福音宣教も大きな仕事である。なお、レヴェイエ神父は、神英明という日本名で、文筆活動もしており、「夜明けとともに」は、よく知られている。

グアダルベ会のアントニオ・バルデス神父は、七月十五日メキシコ市で司祭に叙階された。

三年後来日、二年間の日本語学校での勉強の後、会津若松教会に着任した。若松での司牧のかたわら、田島、喜多方を巡回宣教、六十四年に田島に居を移し、宣教を続け、田島教会を創立した。三年前まで十年間グアダルベ会の管区長として日本管区の責任をとった。今年、田島の巡回教会である福米沢教会の創立五十周年にも当るので、バルデス神父の二十五周年と合わせて、盛大な祝賀が予定されている。

宮城県信徒大会開催予定

◎日時 7月5日(日)午前十時〜午後四時半

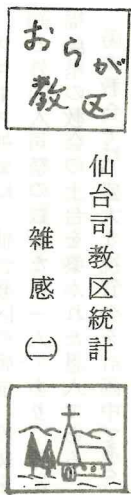
◎場所 仙台白百合学園・幼稚園

◎テーマ 私の福音宣教

今年も昨年同様バネルデイスカッション形式で行い、キリスト者としての家庭生活、キリスト者としての学校生活、の二つのテーマで、親と子、そして教師、それぞれの立場から意見を述べます。なお、幼・小学生は別の場所で開催を設けます。詳細は、各教会主任神父様にお聞き下さい。

塩町教会聖堂帰天

八戸塩町教会の聖堂が、今度イメルダ幼稚園新築のため取り壊すことになりました。50年以上も信者を見守ってくれた聖堂も、今は後かたもありません。一日も早く新聖堂をと、信者一同祈りと資金集めに全力を尽くしています。教区の皆様、どうぞお祈りでご協力下さいますようお願い致します。(塩町教会一同)



雑感 (一)

前号には昨年一年の統計について勝手なことを書いた(反応はまだ出てこなしらした)。今回は、過去三十年間の資料を見よう。ただ、三十年分を全部表わすには紙面をとりすぎるので、一九七五年までは五年毎、それ以降は毎年の数を挙げた。きれいなグラフにとも思ったが、そのためには知恵が足らなかったの、数字をそのまま列挙した。

毎年の統計のとり方は、一九七〇(昭和四十五)年までは前年の七月一日から当年六月三十日までの一年間であったが、一九七二年からはその年の元旦から大みそかまでの一年間、という変更があった。

表1 人員構成。信者総数には信徒・聖職者・居所不明者の全部含まれる。一九五〇年には函館地区も仙台司教区に属していたが、表には、その地区での数は含まれていない。一九五五年の大神学生数の資料は見つからなかった。

最初の十年間に、信者総数が二・四倍位に増えていることがわかる。一九五〇年ごろと言えば戦後の混乱期。求道者数も多く洗礼数(表2)も多い。司祭・修道者数も毎年増えた。現在働いておられる修道・宣教会の司祭方の大半はこの時期に仙台教区にやってこられたであろう。邦人司祭で一九五五年以前の叙階の司祭方は現在八人(五十六年以降は二十二

表 1. 人員構成

年 度	信者総数	教会	司 祭・司 祭	修 道 者	伝 道 師	求 道 者
1950 (昭25)	4705	19	大神学生 38 (14)	志願者 173 (74)	16	1899
1955 (昭30)	7630	40	70 (?)	212 (116)	38	1358
1960 (昭35)	10948	49	91 (19)	279 (37)	39	1047
1965 (昭40)	12409	51	87 (16)	336 (53)	31	725
1970 (昭45)	12471	55	87 (11)	365 (19)	29	303
1975 (昭50)	11988	57	80 (5)	353 (3)	25	506
1976 (昭51)	12223	〃	84 (4)	355 (1)	34	298
1977 (昭52)	12207	〃	86 (2)	349 (5)	24	311
1978 (昭53)	12352	〃	87 (2)	334 (7)	26	309
1979 (昭54)	12336	〃	85 (3)	340 (6)	30	361
1980 (昭55)	12346	〃	85 (4)	330 (15)	30	347

人)である。司祭の数は現在でも決して多くはないが、広い教区を当時、オートバイやジープで土埃をあげながら走り回って働いたものだ、という話を聞く。信徒の活動も、SVP、レジオ・マリエ、学連、青年姉妹会、ロザリオ会等々、ずい分と盛んだったようである。それが年とともに神学生・修道志願者・求道者とも減少の一途。一九六七年が二一八一九人(最多)。教勢は経済の急成長に反比例とは言われないまでもとり残されたという形だ。

表 2. 秘跡・移動

年度	成人洗礼	幼児洗礼	臨終洗礼	結 婚	転 入	転 出
1950	554	188	485	50	57	98
55	803	282	167	118	153	203
60	546	226	118	184	140	362
65	327	222	93	133	160	309
70	212	149	52	156	170	282
75	100	124	41	118	244	171
76	132	130	18	103	215	210
77	120	108	29	88	132	223
78	117	91	31	72	180	206
79	132	95	23	81	142	234
80	133	109	51	93	202	275

ここにおもしろい記録がある。一九七二年に統計の期日が変更されたわけだが、一九七三年、統計調査表を改良しようという動きがあった、その草案が中央協議会から出され、それについて各教区で問題点を指摘することだった。仙台司教区内で指摘された問題点や意見をまとめた記録であるが、その最後に「いんな意見」の一つとして次の一文がある。『会社などは下り坂になると調査が長くなる。この調査(注：草案のこと)は、教会の下りの鏡みたい。』……………閑話休題……………

表2 現在から見ると、一九五五年の成人洗礼八〇三というのは驚異的である。幼児洗礼も多い。その頃、親と子が一緒に洗礼を受けるといふケースが少なくなかったから、幼児

洗礼が多いのもそこに一つの理由があろうし、同時にまた、結婚適齢期で受洗した青年達が結婚し、生まれる子に洗礼を受けさせたというケースも多い。現在はその当時の幼児が成人して結婚する時期となっているから、そこに生まれる子が三代目信者として洗礼を授けられよう。こうしてこれから幼児洗礼数は増えて行くのではないか。家庭の中で子供に信仰を伝え成長させるといつとめは重大なものである。(次号に続く)ー平賀徹夫ー

読者の声

教皇訪日の新聞報道から

菅野耕毅(四ツ家教会)



教皇の訪日は、新聞やテレビのトップニュースとしてその様子が連日詳しく報道された。教会内部の反応は当然のこととしても、教会外の反応が予想外に大きかったことは注目に値する。来日の前日から当日にかけての各新聞の社説は、科学技術が進歩発展をとげながら、それが同時に倫理的であるような新しい道の開拓の呼びかけを期待し(朝日2/22)、原爆の惨害を体験した唯一の国の国民として教皇の核廃絶の訴えには、宗教的立場を超えて胸打たれるものがある(毎日2/22)、また、教皇の訪日は苦難に満ちた人類の歴史や広い外部世界に現存する悲惨な人々の状況に思いをはせるよい機会である(読売2/23)などとして、それぞれ歓迎の辞を述べている。また、広島アピールについても、七億人のカト

リック教徒と広島精神を支える人々との同盟を宣言し、若者に行動を呼びかけ、科学技術にも協力を求める歴史的アピールである(朝日2/22)とか、被爆から三十六年、核兵器が文明の成果のすべてを破壊する恐れが再び強まっている今、この訴えは、私達の胸に強く響く(毎日2/26)とか、我々が忙しさを物質生活の豊かさにかまけて風化させたり、忘れたりしがちになっていた大事な問題を思い起こさせてくれた(読売2/27)など、積極的に真剣に受けとめる姿勢が目立った。

もともと教皇の訪日は、政治的意味を持ったものであり、第二バチカン公会議の流れに逆行する最近のバチカンの反動化の実証に過ぎない(天皇との会見等)とする批判もある(朝日ジャーナル3/13)。しかし、教皇の訪日そのものと日本の言動のすべてをそのような偏狭な見方考え方でとらえたり評価したりすべきではない(サンケイ2/27)し、教皇訪日の意味が何であったかは、私達がそれぞれの立場でどう受けとめて評価するかにかかっている(毎日3/9)といえよう。教皇の訪日はジャーナリストに彼らの予断の誤りを反省させ、「二千年の伝統、世界に膨大な数の信徒を抱えるカトリック教会は私にはいよいよ奥深くとらえたい気がする」(毎日3/9)といった驚きを与えている。こうした、教会外の人々の中に起こったよい意味の驚きや関心や期待に対して、どのように応えていくかが我々信徒に残された課題であるように思われる。



ともかせぎの妹夫婦が二人とも夜勤だったりすると、かれらの一人娘である姪が、わが家にとまりにやってきました。まだ七か月でしたので、手のかかること、おびたたい。それこそ、みんなに「めいわくをかけて」大きくなったようなものです。

ある日のこと。姪が、夜中にとつぜん泣きだしました。家人一同、なにごとかとおびおきたら、なんのことはない、おむつとりかえの催促。おかげで、翌日は寝不足で、一日中あくびばかりしていました。そのことを八木重吉さんは、こんなふうにならうっています。

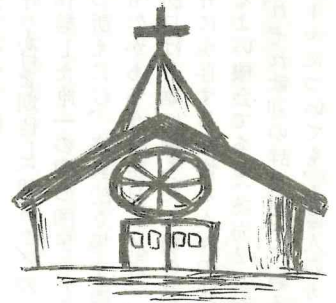
さてノあかんぼはノなぜに あん あん
あん あん なくのだらうか
ほんとにかく うるせいよ/あん あん あん
あん/あん あん あん あん
うるさか ないよ/うるさか ないよ/よ
んでるんだよ/かみさまをよんでるんだよ/
みんなもよびなよ/あんなに しつこくよ
びなよ

まったく、そのとおりです。
姪などは、泣くときには、それこそ、全身を口にして、「あん、あん、あん、あん」と泣いていました。また、わらうときにも、手をふり、足をふり、全身でわらっていました。きつと、有美ちゃんも、そうやって、神さまをよんでたのでしょうね。
幼子の如くあれかし、か。(安井宇江夫)

おらが教会

(8)

福島・松木町教会



私達の松木町教会は、福島県の最北端、福島市にあり、駅から北へ一K、閑静な住宅街に建っている。附近には、桜の聖母学院と小学校があり、短大は、ノートルダム修道院と隣接している。

旧教会は、信夫山の中腹に建っていたが、明治時代の木造建築であったので、老朽化し危険ということで、昭和29年に、現在湯本教会の主任司祭であるラローズ神父様の御努力により現在の教会が建てられた。信者総数は約四百名。毎週の日曜日には、百名前後の信者がミサに参加している。

主任司祭は、カナダ・ケベック市出身のピシエ神父様。これを補佐するポーランド出身のパウロ神父様が、本当の親子のように、仲良く住んでおられる。

ピシエ神父様は、当年68歳になられる。たいへん優しい人柄で、いつもニコニコしておられる。もう少し「ピシエッ！」と厳しく、と望んでいるちまたの声もある。

パウロ神父様は、お若いので、元気に隣接

する桑折町、二本松、飯野町の三教会を車で巡回し、御ミサを献げ、宣教されている。車の免許証はお持ちだが、入手後、日が浅いので、同乗される方は、「特別な祈り」が必要のようである。

信者会長は、忠という名のため、「チュウさん、チュウさん」と親しまれている。教会委員には、聖母短大の教授の方々、小・中・高校の先生方、及び県庁の職員の方々などが就任、誠に多士済々である。

修道院からは、代表としてシスターSが参加、お知恵を拝借しているが、聖職者のこととて、寛容すぎて、「ジレタイ」思いをすることもある。教会委員の顧問として、現代の大久保彦左衛門的存在の二人がおられ、若干煙たがられる時もあるが、当教会には、こうした硬骨漢も必要ではないかと思われる。

我が教会には、アイディアマンが多い。十年前に提案して、今では11回を迎えた「福島県カトリックの集い」は、福島県の四地域を持ち回りで開催され、年々盛大になり、「信徒使徒職は如何にあるべきか」について熱心な話し合いが行われている。

一方、県北を中心に、カトリック、プロテスタントの合同による「福島キリスト教連絡協議会」が結成され、「特別募金運動」に参加して奉仕する外、市民クリスマスの開催など、年々発展の一途をたどっている。

この外、「カナの会」、「ポイスカウト」、「カブスカウト」、信友会（既婚男子）、婦人会（既婚女子）及び、青年姉妹会の組織が

あり、それぞれ独自の働きをしている。

また、若い夫婦の集いである「ナザレトの会」もあり、幼児教育の在り方、信仰生活のあり方について話し合っている。

最後に当教会の自慢を披露して、この稿を終わることにする。

- 一、信者同志の仲が良いこと。
- 二、多趣味で、暖かい人柄の方々が多いこと。
- 三、当教会の「マスラオ派出夫の経営による「大祝日レストラン」の豚汁のうまいこと（婦人会員も「〇〇はだし」と好評）。

(YBK)

投稿規定

★おらが教会・あなたの教会の様子をご紹介ください。教会の歴史、活動、神父様の横顔、その他自慢話など、なんでも！

★テレフオンサービス。教会内外の事で聞いてみたいと思う事にお答えします。どしどしご質問ください。人生相談も引き受けます（それぞれ専門の神父様が答えてくださいます）。

★提言・意見！特に現代の社会問題（校内暴力、防衛問題、教育、政治、経済、等）に關しての御意見をお待ちします。

★子ども達の作品（作文、詩、マンガ等・・・）
原稿締切 毎月十日。

.....
仙台司教区事務所だより44号
昭和五十六年六月一日発行
発行所 仙台司教区事務所
〒980 仙台市本町一丁目2番12号
TEL 0222 22 7371